文理融合による人と社会の変革基盤技術の共創　　2022 年度
2022 年度採択研究代表者　　年次報告書

小倉 有紀子

北海道大学 社会科学実験研究センター
特任助教

共生の条件を探る: 価値観の融和はどこまで可能か?

研究成果の概要

異なる価値観を持った人々がいかに共存しうるかという問いは、昨今重要性を増している。他方で、人の価値観は必ずしも固定されたものではなく、人々の相互作用を通じて変わりうるものである。研究代表者らは、他者との相互作用によって「ものの見方」が融和すること、このプロセスに脳のメンタライジング・ネットワークが関与していることを明らかにした (Kuroda, Ogura, Ogawa, Tamei, Ikeda & Kameda 2022 *Comm Biol*)。ただしこの研究は、客観解のある物理世界についての「ものの見方」を扱っていた。本研究では、客観解のない社会的価値についても同様に「見方」の融和が生じるのか、生じるとしたらいかなるメカニズムによるのかを明らかにする。2022 年度は実験パラダイム構築のため、Ueshima, Mercier & Kameda 2021 *J Exp Soc Psy* の行動データ・対話データ解析を行った。この実験において、参加者はまず資源分配に関する意思決定を単独で行った後、初対面のペア相手と 2 人で対話して意思決定を行った。最後に再び単独で意思決定を行い、対話前と対話後の意思決定の変化を調べた。分配方法には「マキシミン」（最も不遇な者への配慮）・「功利主義」（総額最大化）・「平等主義」（格差最小化）の 3 種類を設けた。対話はマキシミン度合いを定めるパラメータを収束させており、またパラメータの安定化をもたらすことが分かった。この結果は客観解がある場合に生じた「見方」の融和と合致している。また対話データの解析により、会話の前半にマキシミン・功利・平等の 3 軸を念頭に置いた議論がなされ、後半にマキシミン・功利の軸で議論がなされると、意見がマキシミン側に収束することが示唆された。この結果をもとに、2023 年度はスケールアップした形で対話データの収集を行い、実験に必要なボットを作成する予定である。

【代表的な原著論文情報】

1) Wakatsuki, Y., Ogura, Y., Hashimoto, N., Toyomaki, A., Miyamoto, T., Nakagawa, S., Inoue, T., & Kusumi, I. (2022). Subjects with bipolar disorder showed different reward system activation than subjects with major depressive disorder in the monetary incentive delay task. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* **76** (8), 393–400. https://doi.org/10.1111/pcn.13429
2) Kuroda, K., Ogura, Y., Ogawa, A., Tamei, T., Ikeda, K., & Kameda, T. (2022). Behavioral and neuro-cognitive bases for emergence of norms and socially shared realities via dynamic interaction. *Communications Biology*, **5** (1), 1379. https://doi.org/10.1038/s42003-022-04329-1
3) Ogura, Y., Wakatsuki, Y., Hashimoto, N., Miyamoto, T., Nakai, Y., Toyomaki, A., Tsuchida, Y., Nakagawa, S., Inoue, T., & Kusumi, I. (2023). Hyperthymic temperament predicts neural responsiveness for monetary reward. *Journal of Affective Disorders*, **320**, 674–681. https://doi.org/10.1016/j.jad.2022.09.154